

モノクロームの表現で、美しさを追求する

抽象表現の書芸術を描く、墨象作家の宮村弦さん。追求するのは、書という日本の伝統を通した「美」。毎日書道展毎日賞や今年度の島田市芸術文化奨励賞などを受賞し、その活躍の場を広げています。

【書道の展開】

「小学校を卒業する頃からプロを夢みていました。書の道に迷ったことはないです」と話す宮村さんと書道との出会いは、小学1年生のとき。高校・大学・大学院でも書を学び、作品を制作し続けています。「卒業後は、県内の高校で書道を教えつつ、書家として書道作品、アーティストとして墨象作品、その両方を制作していましたが、縁があつて東京都内のギャラリーを紹介してもらい、都心での活動も始まっていました」と当時を振り返ります。その後は、アーティストとしての

活動に専念し、精力的に展覧会を開催。国内外で、制作活動を広げていきます。現在、

墨象作品を主に制作している宮村さんですが「情報に恵まれた東京では、現代的な作品の展示や教室などを行い、

切にしているそうです。

【ものづくりへの信念】

「人は、アート無しでも生きて行くことが出来ます。でも人には、本能以外のこだわりや感受性があります。そこ



書芸術の追求をする墨象作家
宮村 弦さん（湯日）

落ち着いた環境の島田では、制作を中心に行っています」と二つの拠点を生かしています。制作に迷った時には、島田の自然の中でインスピレーションを広げたり、ものづくりに没頭する時間を大

に、他の動物とは違う人間の面白さがあり、人間らしい生き方につながるのだと思います。作品には、私自身が感じた美や発見を込めて、ものづくりを通して『美しさ』を追及しているんです」

今までの経験から宮村さんは「多くの日本人は、書道に

対する美意識や感覚が高いのに、自分の中で整理できないものを他人の評価に任せている人が多いと思います。しかし、時には好きなものを好きと表現するなど、自分で判断することも大切です」と話します。だからこそ、子どもたちにもワークショップに参加するなどして「ものづくり」の経験を重ねて欲しいと続けます。「丁寧に心を込めたものづくりから、人やものを思う想像力も育ててあげられるはずです」

【力強く歩む道】

「仕事や生活、価値形成や出会いなど、私の経験の多くに、『書』という軸があります。高村光太郎の詩の一節『踏み出す足は必然だ』という言葉に思いが繋がりました」その言葉を後押しに宮村さんは、信じた道を力強く意思のある歩みで進んでいます。これからも、書道とアートに対して、まっすぐに向き合いながら、「追求する美」を多くの人に伝えてくれるはずです。



百貨店のディスプレイにデザインする宮村さん

▶宮村さんの活動は、ホームページでもご覧になれます。

☞<http://gen-m.jp/>

Shimadajin File #65

しまだじん